

紙芝居

はだしのゲン 第四卷

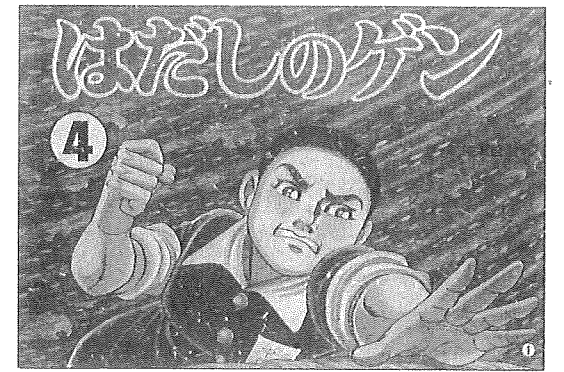
1991年4月発行 (16場面)

発行者 吉元 尊則

発行所 株式会社 汐文社

東京都文京区本郷1-26-10  
電話03(3815)8421

印刷・製版 特飛来社



紙芝居

# はだしのゲン

第四卷

①

中沢啓治 作・絵

ゲン 「わしや、ゲンじや。

元氣のゲンじや。

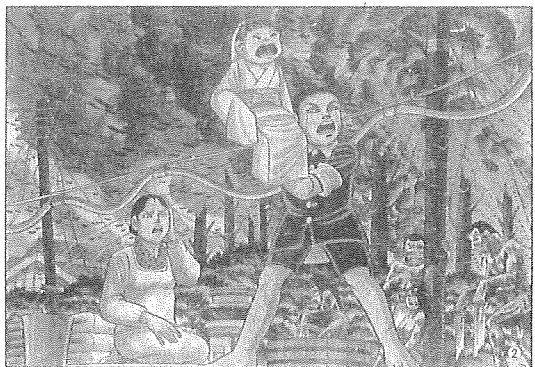
わしや、どんなに苦しくても、

悲しくても、めげんぞ、負けんぞ。

わしや、元氣のゲンじや」

……ぬく……

〔演出ノート〕  
明るく、元氣よく



②

原爆で地獄と化した広島街。ゲンとお母さんは郊外へ逃げのびましたが、突然お母さんが苦しみはじめました。

ゲン  
「お母ちゃん、がんばれ！ 元気な赤ちゃんを産んでくれーよ」

力強く

ゲンは、まわりのつぶれた家から赤ん坊を産むために必要な物をとりあつめ、お母さんをはげましました。やがて「オギャー」と大きな声がひびきわたる、新しい「いのち」が産みおとされました。

ゲン

「お父ちゃん、英子ねえちゃん、進

大声で

次、生まれたよ、赤ちゃんが生まれたよー。進次、おまえの子分は女じゃあ。もうこの赤ん坊を、お父ちゃんも、英子ねえちゃんも、進次も、見ることができんのじゃのう。くやしいのう……くやしいのう……」

泣き声で

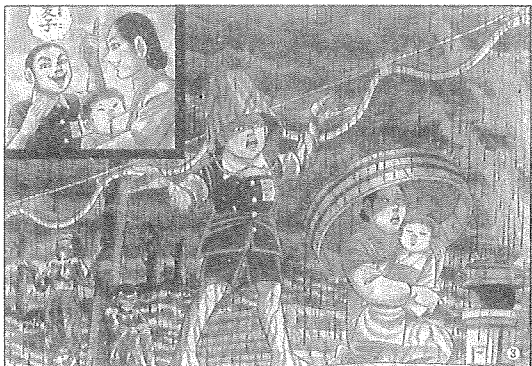
ゲンは悲しくなつて赤ん坊を抱きながら、泣きつづけます。お母さんは、赤ちゃんに向かって、語りかけました。

君江

「しっかりとこの姿を見とくんよ。戦争のほんとに恐ろしい姿を」

はっきりと

……ぬく……



③

原爆が投下されてしばらくすると、上空が真っ黒い雲におおわれて、大粒の黒い雨が降りだしました。

ゲン

「ああ、なんじゃ、この黒い雨は。重

不思議そうに

油のようにキラキラ光って変な雨じゃのう」

君江

「ほうじゃねえ……」

この雨は、放射能をふくんだ、とても恐ろしい雨だったので。放射能は、人間のからだにしみこんで、何十年も生き残った多くの人々を病気にして苦しめ、白血病やガンで殺しつづけていきました。

原子爆弾には、第二の恐怖があったのです。

ゲンは、赤ん坊に、多くの友達ができるようにと願って、「友子<sup>ともこ</sup>」という名前をつけました。

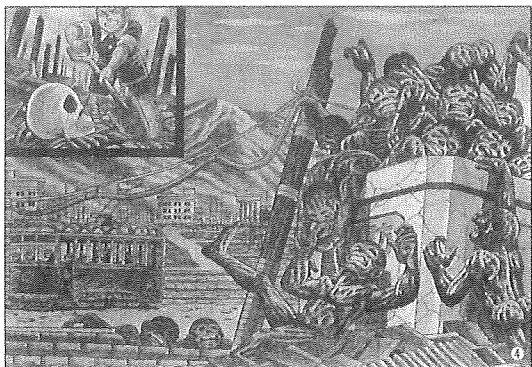
君江

「友子……。ほんまにええ名前じゃねえ」

お母さんも心から喜びました。

やさしく

……ぬく……



4

広島市は、見わたすかぎりの焼け野原になって、川も街も、死体で埋まりました。そして、七十年間は草木もはえないだろうといわれる死の街となつてしまいました。

広島市に原爆が投下されてから三日後、長崎市にも原爆が投下されたのでした。

ゲン  
「ここに、わしの家があったなんて、うそのようじゃ。」

ゲン  
「お父ちゃんも、英子<sup>えいこ</sup>ねえちゃんも、進次<sup>しんじ</sup>もこの下にねむつとるんかのう。うそかほんとか掘りだしてやるぞ」  
あれから、みんなが無事に逃げていてくれることをねがいながら、ゲンは掘りました。

ゲン  
「たのむ、でてくれんでくれー」  
しかし……。

ゲン  
「うわー、骨じゃー。やっぱりみんな、死んだんかー。ちくしょう、ちくしょう」

……ぬく……

大きな声で



⑤

変わりはてた、お父さん、英子、進次の姿を見て、ゲンは泣きました。

ゲン

「お父ちゃん、英子ねえちゃん、進次……。熱かったろう、つらかったろう、苦しかったろう。うううう……。」

泣き声で

戦争のバカタレ。わしのお父ちゃんをかえせ、英子ねえちゃんをかえせ、進次をかえせ。バカタレ、バカタレ。

はっきりと

進次、もういっしょに川へ行つて船を走らすこともできんのう。わしや、くやしいよ……。」

泣き声で話しかけるように

ゲンは、焼け跡にいつまでもうずくまって泣きつづけました。

(間)

八月十五日、日本は戦争に無条件降伏むじようけんこうしました。

多くの犠牲を払って、戦争が終わったのです。

……ぬく……